子ども，(6)保幼小連携おける伝達項目という６つの観点から調査を行った。2009 年度は，同様の調査を，小平市内の幼稚園・保育園 5 歳児クラス担任を対象に行い，25 園の 48 名から回答を得た。その結果，連携に対する意識として，連携ができている場合は，話し合いや情報交換が多く，園児と児童の交流だけでなく，教職員同の交流もがうまくいっているが，連携ができていない場合は，情報交換の少なさに加え，情報が活かされていないというもどかしさを感じていることなどが明らかになった。小学校教諭対象の調査と，幼保を対象とした調査を比較することによって，小学校と幼保それぞれが考える連携の課題の差異が明らかになった。これらの結果の一部は，2009 年度白梅の保育セミナーにおいて，小平市の幼小，保小の連携に関する資料として報告した。

ヨーロッパ諸国における世代間交流

── 特にフィンランドでの学校ヴォランティアを中心に ──

草野　篤子・石橋　鍒子

１．はじめに

最近，ヨーロッパ諸国の中でも，特にスウェーデン，デンマーク，フィンランドなどが注目されている。その中で北欧福祉国家フィンランドは，国の競争力も生活水準も高く，民主主義を基盤に，国と自治体は，社会福祉と保健，教育と研究に不可欠な役割を果たしている。また，市民は NGO をとおして，サービス提供者として制度に参加して国全体に活力をあたえている。[1)] 経済面では，国民総生産の４％近くが研究開発に使われているという。

また，OECD の行う PISA（学習到達度調査）では，フィンランドは，その読解力と数学において１位である。学校制度，教育方法など複数の要因が重なっている中，元教育庁総裁が指摘しているように，側面から教育を支える事業，つまり，生徒のケア，学習指導，通学ヘルパー，学校ソーシャルワーカー，学校保健ケア，なども重要な要素である。[2)]

フィンランドの国土は日本よりやや小さく，人口は 520 万である。そのうち 67%（約 96 万人）が都市部に集中している。また，国土の 7 割は森林である。

２．フィンランドの現状

フィンランドでも高齢化が進んでおり，労働力の減少，退職年齢の引き上げ，年金問題などに取り組む問題がある。しかし，この国では，高齢者に限らず全年齢を対象に，ワーク・ライフ・バランス（仕事と私生活の両立）やエイジ・マネジメント（年齢に配慮した人事管理）といったアプローチの研究がしっかり進んでいる。

行政サービスにおいては，地方自治体（市町村）間の格差が少なく，高齢化問題は，最重要課題と捉え取り組んでいる。その傾向としては，「施設ケア」から「在宅ケア」へと移っている。

人口が都市部に集中しているということは，高齢者が往々にして地方に取り残され，日本と同じく，高齢者の孤立化がみられるのではないか。世代間交流の実施はどうなっているか。

1994 年から 1996 年にかけて，フィンランドでは，国立福祉保健研究開発センター（STAKES：Research and Development Center for Welfare and Health）の企画で，「高齢者の家族デイケア・プロジェクト」（VARPU）の中で，子ども・高齢者統合デイケア（combined day-

care for young and old）が実施された。[3] これは，初めての試みで，先ず，自治体で実施し，STAKES が助けるという方法がとられた。これは，あくまでも実験的なものであって，自治体がその後の採否を決定することになっていたが，今回の調査では，STAKES は，すでになくなっており，名前を変えて国立保健福祉研究所（National Institute for Health and Welfare：THL）が現在，保健福祉関係の研究調査開発をおこなっている。上記の子ども・高齢者統合デイケアの実施が行われていることは聞かれなかった。

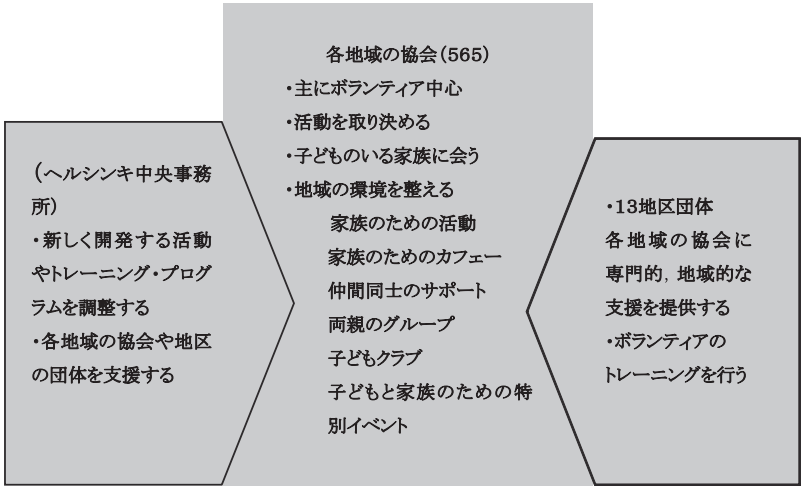
今回たずねた，THL では，特に世代間の交流プログラムはなかったが，各世代のエイジ・マネジメントの研究が進んでおり，研究はそれぞれの世代への配慮が多く，結果的に世代間の協調が目的である。

フィンランドでも高齢者に加えて，核家族化がすすみ，高齢者と幼児の交流が話題に上ったことがあるという。人々が地方から都市部に移動した時代の後に始めたというという，「村のおじいちゃん，おばあちゃん」プログラムを実施している団体をみつけた。これは，核家族化も進み，おじいちゃん，おばあちゃんを知らない子供が増えたという危機感から生まれたプログラムである。

3．マンネルヘイム児童福祉保護同盟

（The Mannerheim League for Child Welfare ：MLL）家族と子どものための活動団体

ＭＬＬは，誰でも参加できる非営利団体であり，子どもと，子どもを持つ家族の幸せを推進し，子ども時代を尊重し，子どもの視点が公共の意思決定に反映されるよう見届けることを理想としている。



全ての子どもが，良き幸せな子ども時代を送ることが出来るように，MLL は公共あるいは私立の数多くの団体，企業，国内外のネットワークと協力している。

MLL 同盟の信条は，

○ 子どもたちは社会の平等なメンバーである。

○ 全ての子どもは，よい幸せな環境を与えられるべきである。

○ 親になることと教育は尊重され支援されるべきである。

○ ボランティアの仕事，援助，介護，共同責任は，仲間たちの力を増す。

○「家族カフェ」や「仲間による支援」などを通して，「家族・社会サービス・ネットワーク」を実行する。

○ このネットワークは自治体と地域のボランティア団体の連携によって成り立っている。お互いに，出来ること，得意なこと，どんな活動が出来るかなどを話し合い，同意して行う。
○ これによって，家族が疎外されることを効果的に防ぐ。
○ 多くの両親たちは，似た環境・状態にいる人からの手助けをうけやすいと感じる。また，必要があれば，専門的な助言も受けられる。
○ MLL の「家族カフェ」は家族を結びつけ，フィンランド全体では，400 の家族カフェがある。
○「家族カフェ」は，家族や子どもが気軽に集まることが出来る場所である。
○「家族カフェ」では，ボランティアたちがいろいろな役目を果たすことができ，必要に応じて，昼間でも夜間でも，子どもと家族のニーズに応じて，諸々の活動を計画することが出来る。
○ 日常の生活が送りやすくなるように，両親がお互いに助け合う場所を提供する。
○ 子どもたちが，楽しく遊べるように友達を作り，お互いに仲良く出来るような機会を作る。
○ 特別なグループ，例えば，移民の人たちのために特区を設ける。
○ 主に，時間や場所を変え，デイケア・センターや，運動場，行楽地，若者用クラブ，児童保健センターなどで集まる。

地域のボランティアたちは，日々の喜びのため，両親の支援，子供たちの遊びのために頑張っている。

「地域の祖父母」プログラム
（Communal Grandparenting）

こうした中で，MLL は多世代で子どもを支援する通称「村のおじいちゃん・おばあちゃん」と呼ばれている世代間交流プログラムを実施している。

◇ 異世代の人々が会って一緒に過ごすことは，こどもと大人両方の人生を豊にする。
◇ その目的は，三世代がお互いに知り合い，一緒に行動する機会をつくることである。
◇ MLL の世代間をつなぐ活動は，単に，生物学的な繋がりといったものよりも広い意味あいの中で理解することが出来る。自分自身に孫がいない高齢者たちも，「おじいちゃん・おばあちゃん」を経験する機会があたえられ，単に表面上だけでなく，深く付き合うことができる。

プログラムは，おもに各地域の協会によって計画されたグループ対象のイベントが中心である。

◇ 各種の活動が，デイケア・センター，学校，図書館でも企画される。
◇ 子どもの視点からいうと，最も大事なことは，一緒にいること，耳を傾けてくれること，支援してくれること，そして，勇気づけてくれることである。
◇ 中央事務所では，新しい活動を企画し，それを試してみる。また，地域のボランティアや地区事務所の専門家たちのためにハンドブックなどの資料を作成する。
◇ MLL の地区事務所では，祖父母たちの研修を行い，地域のボランティア祖父母に報いる。

以上が MLL の活動である。

4. 高齢者サービス連合
（The Union for Senior Services: VALLI）

次に，MLL の活動ほど，世代間交流活動プログラムに直接的にかかわってはいないが，フィンランドの高齢者に関する諸問題を全国規模で専門的に取り組むことを目的とする「高齢者サービス連合」（The Union for Senior Services: VALLI）を訪れた。ここは，第二次世界大戦後すぐ，高齢者の住居や生活の質向上のために設立され，1953 年には，統計調査に基づいた「高齢者

の現状」を出版している。

この連合体に加盟している高齢者施設は，1953年には7団体であったが，2010年現在で6 4団体が加盟している。理事長は，1986年から1995年までは現大統領であるハロネン女史がつとめていた。その後をうけ，社会保健大臣，スタケス(国立社会福祉保健研究開発センター)総裁をつとめたヴァップ・タイパレ女史が現在理事長を務めている。

主な実際の取り組みとしては，協力団体やパートナー団体のための「相談業務」「研修」「事業開発」「出版事業」をとおして，革新的で融通のきく高齢者へのサービスを開発している。各団体の活動を支援し，社会の変化にともないネットワーク作りを助ける。

研修では，最新の訓練を提供し，高齢者ケアの刷新を手助けし，あたらしいビジョンと方法を周知してもらう。少なくとも，各団体は年2回この研修をうける。

事業開発の分野は，例えば，自宅に住む高齢者のためのもの，第一級のそして革新的なサービス，高齢者のためのサービス提供者の確保，個人的支援のアプローチ，高齢者に優しいテクノロジーなどである。

出版物は雑誌「高齢者ケアの新しい風」を年間7回出版している。この分野での最新の展開，経験，専門的見地や意見，調査データなどの最新情報がふくまれている。

VALLI はフィンランドの現状を次のように見ている。

▶ 人口の高齢化
▶ 独居者の増加
▶ 高齢者の健康状態の向上
▶ 教育レベルの向上
▶ 認知症の増加
▶ 年金の増加
▶ 看護サービスの需要増加
▶ 効果的コスト管理の重要性
▶ 施設の役割の重要性

また，高齢者人口の将来の見透しとして，以下のように予想している。

	65歳以上	75歳以上	85歳以上
2008	892 068	103 797	419 211
2010	940 738	433 413	112 736
2015	1 129 537	480 402	137 910
2025	1 394 172 (56%増加)	708 112	177 455

Tilastokeskus, väestöennuste 2007

労働人口，子ども，高齢者の人口割合を以下のように予測している。

人口における保育および介護の関係
1965年から2050年まで
― 100人の労働人口(16歳から64歳)に
対する子どもと高齢者の数 ―



ヨーロッパにおいては，市民社会の市民による活動が介護サービスの一番の提供者であると考えられている。フィンランドでは，市民による活動が介護サービス全体の四分の三を提供する。対象は，どちらかというと，子どもより高齢者である。学童の約2％は祖父母が面倒を見ており，学童の約2％は祖父母と一緒に住んでいる。

現在 EU の高齢者に対する社会福祉は，在宅介護の傾向にある。75才以上の高齢者にたいする国家目標は，91−92%が自宅に居住することである。したがって，VALLI の使命は，加盟施設をとおして，在宅介護の支援，サービス・センター

のモデルと事業を開発すること，近隣付き合いをふやすことなどである。

VALLI 本部で説明を受けたあと，カピリネ・サービス・ハウス（高齢者保護施設 Käpyrinne service house/ sheltered home for aged people）をたずねた。その時（2010 年 3 月 27 日）イースターのお祝いをかねて，子どもたちが高齢者にプレゼントを持って訪ねてきた。

翌日，実際に，VALLI が加盟施設の一つである「カンティ高齢者サービス・センター」において，世代間交流プログラム準備の一環としての，研修の場に参加することができた。これは高校生が対象であり，ボランティアとしての心得から，実際の具体的な場面を想定した内容であった。にボランティアとしてのトレーニングを行う場に参加することが出来た。今回は，精神的に問題のある入居高齢者のケアを手伝うための研修であった。本部スタッフからの講義，施設長からの話し，そしてシニア・ボランティア自身からの経験談を聞く時間もあった。

５．むすび

1994 年にスタケス（国立福祉保健研究開発センター）によって行われた「子ども・高齢者統合デイケア」プロジェクトのような，自治体への指導的立場にある機関の試みはその後見られないが，ここ数年，各地で個々のNPO やサービス・センターが世代間交流活動を実施している。また，最近では新聞でも高齢者と子どもの交流を多く取り上げている。これらの中には，若者中心社会の中で，高齢者側に対する取り組みが多いが，双方に有益にウィン・ウィン（win win）な手法として世代間交流が新たに注目されている。

また，高齢者に限らず全年齢を対象に，仕事と私生活の両立を志向するワーク・ライフ・バランスや，年齢に配慮した人事管理を求めるエイジ・マネジメントといったアプローチからの研究が着実に進んでいるフィンランドで，世代間交流の実施がどのような形で進行するのか，今後の進展を注目していきたい。

引用文献

１） タルヤ・ハロネン「刊行に寄せて」，イルッカ・タイバル編著「フィンランドを世界一に導いた 100 の社会改革」 公人の友社 2008　p.3

２） ユッカ・サルヤラ「フィンランド児童の読解力」前掲書　2008　p.167

３） 広井良典「フィンランド　子ども・高齢者統合デイケア」，広井良典　編著「老人と子ども　統合ケア―新しい高齢者ケアの姿を求めて―　中央法規　2000　p.179